

ハーバート・ノーマンと歴史の悲劇

日本学術振興会カイロ研究連絡センター長 長沢 栄治
(前・信州イスラーム世界勉強会代表)

〔赤い楓とワールドカップ〕

いつの間にか火炎樹の花も盛りが過ぎた。季節が進む足取りが速くなった気がする。その赤い花がまだ輝きを見せていた頃、近所のカナダ大使の公邸に「カナダはエジプトを FIFA ワールドカップに歓迎する」という大きな垂れ幕がかかっているのを見かけた。北中



レストラン ZAZA にて FIFA 日本対ブラジル戦を観戦
(撮影:長沢美抄子)

米 FIFA2026 年大会の開催国カナダ、そしてエジプト、日本のそれぞれの試合結果は、皆さんもご存じの通りである。エジプトが勝った日には、こんな朝早くから結婚式場に向かう自動車が来たのかと勘違いしたほど、慶事を知らせるクラクション（プープーぷぷー）が通りに大きく鳴りひびいた。日本の対オランダ戦の試合は、普通のテレビでは放映されないの、近くのオランダ大使館を訪ねて観させてもらおうか、などと冗談を言っていたが結局、表通りにあるレストランの大画面で静かに観戦した。

カナダ大使公邸は、白い縁取りが映えるサーモンピンクの可愛らしい邸宅である。学振のカイロ事務所と居宅が入っているビルと同じアルカーメル・ムハンマド通りのご近所で、フランシスコ会系のお金持ち学校を間に挟んで一軒向こうに位置する。自宅

の南側のベランダから眺めれば、公邸の屋上にはためく国旗のカナダ楓は、近くの火炎樹の花の色を映しているように見える。この現在のカナダの国旗は、1965年に制定されたが、それにはエジプトでの戦争が関係している。

1956年のスエズ戦争に際し、カナダは中立の立場から平和維持部隊をエジプトに派遣した。しかし、このとき左上にユニオンジャックをあしらった当時の国旗が、イスラエルとフランスと謀議を図り、エジプトに攻撃を仕掛けてきたイギリスの旗とダブって紛らわしい、ということで問題になったのである。カナダの外相ピアソン（後に首相）は、このときの国連平和維持部隊の創設への貢献から、戦争の翌年1957年にノーベル平和賞を受賞している。そして当時、現地カイロにいて、カナダ大使としてスエズ戦争の停戦交渉に大きく貢献したのが、日本史研究者として名高いハーバート・ノーマンであった。『忘れられた

思想家―安藤昌益のこと』（1950 年）など数々の著作を遺したノーマンだが、多くの日本人にとって彼自身が「忘れられた歴史家」になっているのかもしれない。

さて、調べてみるとノーマンはこの学振事務所の近くの大使公邸には当時、住んでいないことが分かった。この瀟洒（しょうしゃ）な邸宅は、持ち主が転々と変わり、ファールーク国王の元妻のファリーダ王妃も一時、住居としたことがある。美人で国民的人気のあった王妃を離婚したことが国王の評判を落とし、1952 年革命で彼が王座を追われる原因の一つになったとも言われる。この邸宅がカナダ大使公邸となるのは、ノーマンがカイロで客死した翌年の 1958 年以降のことである [注 1]。

居室の南のベランダからカナダ大使公邸を望む

エジプト赴任当時のノーマン大使は、現在も米国大使館の近くにあるカナダ大使館の中に居住していた。1957 年 4 月 4 日（木）の朝、彼は大使館のあるガーデンシティ地区を出て、カスル・ニール橋（通称“ライオン橋”）を渡り、ナイル川の西岸まで来た。9 時半頃であったというから、朝の散歩という時間ではない。歩けない距離ではないが、大使の立場であったから自動車に乗ったかもしれない。そのとき、どのような思いでナイル川を渡ったのだろう。そして、現在のギーザ・シェラトン・ホテルの斜め向かいに位置する、8 階建てのビルに入り、その屋上から身を投げた。フィンニー通り（現在のサッド・アーリー [(アスワン) ハイ・ダム] 通り）に建つそのビルの最上階には、友人のスウェーデン大使館公使が住んでいたという。



兄ハワード（父の後を継いで日本で合同教会宣教師になり、戦後も再来日して関西学院大学文学部・神学部教授、当時は神戸市に居住）に宛てた遺書には、彼がキリスト者として死を選んだ心境がつづられている。

「私は環境に圧倒されました。そしてあまりに永く幻想のもとにいきすぎました。キリスト教が唯一の真の道でありと悟ります。・・・ギルト・バイ・アソシエーション〔同類と見なされ有罪だと告発されていること：引用者〕がいまや私を押し潰すまでになりました。私は遅すぎないなら、神に祈っています」（大窪憲二「覚書 ハーバート・ノーマンの生涯」『ハーバート・ノーマン全集』[以下、『全集』と略] 第四巻) [注 2]。

〔ハーバート・ノーマンと信州〕

ハーバート・ノーマンは 1909 年、メソジスト派のカナダ人宣教師ダニエル・ノーマン（1864-1941 年）の次男として、現在の長野県軽井沢町で生まれた。父ダニエルは、トロント市近郊の出身で、1897 年に来日し、1902 年から長野市に居を定めた（1940 年まで）。1897 年に外国人避暑客のために軽井沢合同教会（ユニオンチャーチ）、1905 年には日本人

向けに軽井沢合同基督教会（現・軽井沢教会）を創設した。売春禁止運動や禁酒運動にも取り組むなど、地域社会の中に溶け込んで布教活動を行なった。

ノーマンは、1947年6月21日、長野市縣町（あがたまち）教会で開催された父ダニエル（41年6月19日死去）の遺徳を偲ぶ追悼式に招かれ、「信州愛」に溢れた記念講演をしている（「封建制下の人民」[大窪愿二訳]『全集』第一巻 365-67 頁）。以下、長いが紹介する。

明治以前の信州は「米の生産地としては大したことはなかった」のですが、明治維新以降「養蚕と多角的農業の最も重要な地域」となりました。なぜなら「長野県の農民は割合に早くから商品市場に関係して、進取的なそして近代的な考え方を発達させた」からです。それゆえに「非常に進歩的な精神をもつことになりました」。「この県において、人民に対する封建的風習の影響力が割合に弱く、それだけにまた、人民の精神がしっかりしていて、独立の気風があるということのために、私の父などもこの土地の人たちに親しみをもったであろうと思われます。同じことがまた信州人の名声を博している理由でもありましょう。そして、私はそういう長所美点に深い尊敬を惜しまない者であります。そのことのためにまた一部の旧式官僚からは信州人は新しもの好きで、政府が勝手に何かを押しつけようとしても、とてもその手には負えないという名声をもらっているようであります。

そういうわけですから、かつて、日本民主主義運動の先覚者たちが、わざわざ長野の政治運動の地盤にえらんだのは偶然ではないと考えられるのであります。・・・あの熱烈な人道主義者の木下尚江も信濃毎日の記者となって、この地を文筆生活の安住の地と考えました。近年、長野県は教育水準と読み書きができる率が高いのが有名で、教育が県のすみずみまでゆきわたっていますが、これは、両親も子供も学問好きで村々の先生方も教育を熱心にやっておられるためであります。

戦後の民主主義的改革のおかげで、ことに最近の地方分権傾向のために、信州が発展し進歩する機会是一段と高まりました。この地方自治強化の動きにつれて、以前にあちこちの県の物質、精神生活を妨げ押さえつけてきた東京の圧倒的な官僚政治の負担は大いに軽くなることでしょう。信州人は今から 80 年前に比較的自由な、進取的な、自立的な精神をもって封建制度から立ち上がり長野県を日本で最も進歩した県の一つにしました。ちょうど同じく、今日信州はなが年の暗黒な戦争と暴虐から立ちあがっています。町はあまりやけていません。県民はきびきびした精神と強い感受性をもって目下行われつつある改革を迎えています。ですから、私は信州が将来も物質ならびに文化の進歩において、日本のほかの地方とくらべても高い地歩を占めて行くであろうとたく信じ、またそれを心から希望してやまないのであります。

以上のノーマンの話とも関係するが、農家出身である父ダニエルは農業技術にも詳しく、稲作以外の換金作物を求めている地元農家にトマト栽培を紹介したこともあるという。彼は「長野県人のなかに溶け込んだ人」であり（松田智雄の評）、野尻湖の別荘地から日本人を排除する人種差別的な案に反対した人間であったからこそ息子のハーバートに大きな

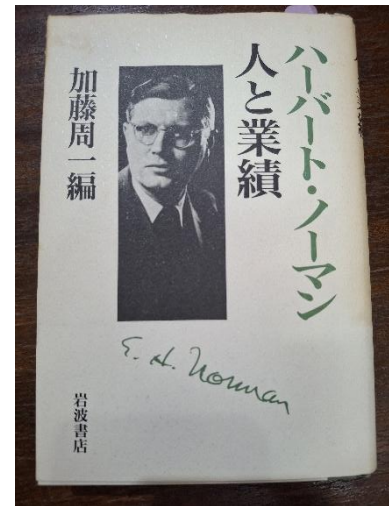
影響を与えた（ジョン・W・ダワー）父親であった（いずれも加藤周一編『ハーバート・ノーマン 人と業績』岩波書店 2002 年 281、55 頁）。ノーマン一家が暮らした家は飯綱高原に移築され「旧ダニエル・ノルマン邸」として長野市の指定文化財となっている。

〔「狂信と偏見と不寛容」の中の死〕

ハーバート・ノーマンの突然の死は、日本の友人たちに大きな衝撃を与えた。とくに丸山眞男によるノーマン追悼の辞は、痛恨に満ち、また激烈である（「E・ハーバート・ノーマンを悼む」『毎日新聞』昭和 32 年〔1957〕年 4 月 18・19 日；加藤編前掲書に所収）。

「人間性の美しさをあのように愛し、知性による説得の可能性にあのように信頼をかけていたノーマンが、その長からぬ生涯の最後を、狂信と偏見と不寛容にとりまかれながらその命を絶ったとするならば、残された我々は何をすればよいのか」（加藤編 115-16 頁）。

このように結ぶ追悼文の前には、次のような言葉が並んでいる。「それにしてもアメリカのマッカーシーないしはその亜流の数年にわたる執拗な、しかも遠巻き攻撃がノーマンの名誉をはなはだしく傷つけ、彼の心身をさいなんでいたことは否定できない」。こうした「徒輩（とはい）がある人を共産主義者と言うときにどういう意味を含ませているか」というならば「第一に通常の品位さえ欠いた人間、つまりはギャングやゴロツキと同義であり、第二にソ連のスパイということにひとしい」ということなのだ。しかしこうした「当の相手こそまさにカナダのピアソン外相の言をかりれば、ただ『彼らにふさわしい軽蔑の念をもって遇する』ほかない。つまり、決闘にも値しない政治ゴロなのだ」（同 115 頁）。



丸山は『「文明論の概略」を読む』の中で、福沢諭吉を評して「福沢はものの考え方をからかったり、皮肉ったりするけれども、自分のなまの感情はめったに出さない」と述べている（『「文明論の概略」を読む』岩波新書 1986 年（下）206 頁）。しかし、ここでは丸山自身が、まさになまの感情を珍しくも表に出しているように見える。

また、加藤周一は「E・H・ノーマン、その一面」の中でノーマンとの思い出を次のように語る。「私はノーマン氏との短くまた数多くない会話において、ただ知的刺激をたのしんでいたわけではない。無学な無名の青年に対しても決して差別しない態度と細かい心遣いに感動していたのだ。『優しい心』、それ故に傷つき易い心が、狂信主義に対する怒りに引き裂かれていたことは、たとい見まいとしても、見誤りようがなかった。ノーマン氏は、文明を、あらゆる狂信主義に対する反対の証言として、定義していたといえるだろう。その定義こそは、今も、私にとって重要なものである」（加藤編前掲書 228 頁）。

ノーマンを死に追いやったものは何か。この問いについて、加藤はマッカーシズムに代表される「思想的マニケイズム（マニ教的二元論）」を断罪する。この「身方か敵か、善か悪か、白か黒か」を迫る考え方とはまさに対極にあったのが歴史家ノーマンであった、と彼は述べる（同 viii頁）。おそらくこの指摘は正しいだろう。その後、狂信的な「思想的マニケイズム」は、たとえば「対テロ戦争」という名前の下に、現在の世界でも跋扈（ばっこ）し、多くの人々の命を奪っている。

しかし、この稿を準備するにあたり、少し調べてみると、ノーマンの死について他の要因もあるという主張を知った [注 3]。ノーマンは 1940 年にハーバード大学に博士論文“Japan’s Emergence as a Modern State”（後に邦訳『日本における近代国家の成立』[大窪愿二訳] 1953 年；その後、岩波文庫に所収）を提出した。この本は GHQ による日本占領政策の「教科書」となった。そして彼自身も実際、マッカーサー將軍の知己を得て、占領行政に加わった。そして彼の名声をさらに高めたのが、1948 年に東京のカナダ大使館で行なった講演“Andoh Shoh’eki and the Anatomy of Japanese Feudalism”（後に『忘れられた思想家—安藤昌益のこと』[大窪愿二訳] 岩波新書 1950 年として邦訳）であった。しかし、こうした彼の名声を妬む者も同僚の中にいたのだ、というのである。

つまりノーマンは、冷戦という時代の殉難者、狂信的な「思想的マニケイズム」の犠牲者だただけではなかった。その死は、不寛容な「正義」に名を借りた個人的な嫉妬に由来するものでもあったのかもしれない。たとえば、文革時代の中国の多くの理不尽な死の事例を思い浮かべるなら、それは大いにありうる話だといえる。

さて、丸山眞男は、『思想』の「特集 ハーバート・ノーマン—死後 20 年—」（1977 年 4 月）における萩原延寿との「〈対談〉クリオの愛でし人」の中で、ノーマンの死について再度、自身の見解を示している。丸山は、ノーマンの「在エジプト・カナダ大使への就任」が「スエズ運河公有化をめぐる一触即発の事件にぶつかった」という「結果的には悲劇」となったことについて、次のように語る。

（丸山）ノーマンはナセル大統領にはすごく信用あったそうですね。西欧側で仲立ちできた外交官はほとんどノーマンだけだったのではないのでしょうか。イギリスが出兵をやめて秩序維持の為に国連軍を駐留させるという解決策に対してナセルはすごく受諾をしぶったわけでしょう。それをのませる交渉をやったのがノーマンです。だからほんとうに心身をすりへらした。それと前から執拗につづいていた、アメリカ上院治安委員会の赤狩りの一環としてのノーマン攻撃が再燃した時期とが重なった。

（萩原）疲れきったのでしょね。

（丸山）だからマッカーシイズムだけではなくて、この間なくなった、当時のイギリスの首相イーデンなんかも、ノーマンの死に対しては結果的に責任があるな。

（『思想』1977 年 4 月 [634 号] 550 頁）。

実際、ノーマンの調停外交が功を奏し、1957 年 3 月 6-7 日にはそれまでイスラエルが占領していたガザに国連の平和維持軍（UNEF1）が入った（スエズ戦争勃発時のイスラエル

国防軍によるガザのエジプト軍基地への攻撃は悪辣で残酷なものであった)。しかし、同じ時期、彼には“赤狩り”の波が激しく襲いかかっていたのである。3月25日には、友人から再び SISS（アメリカ上院治安委員会）の追及を受けているとの報を聞いて、ノーマンは大きな衝撃を受けている。当時、「赤い大使」がイギリスのスエズ運河喪失の手助けをしている、などといったデマが流されていたのである。ノーマンが自死を遂げるのは、知らせを受けてから10日後の4月4日のことであった。

〔ノーマン大使とナセル大統領〕

ハーバート・ノーマンがカナダ大使としてカイロに着任したのは、1956年8月19日である。ナセルがスエズ運河の国有化宣言を行なった7月26日からわずか三週間後のことだった。ノーマン大使はナセル大統領と四回にわたって会見し、その感想を外務省本省に報告している（『全集』第二巻「外交官ノーマン—スエズ戦争前後」に所収）。

その中でノーマンは、ナセルのスエズ運河国有化の演説について厳しい評価を下している。「聴衆の反応が最初はやや鈍かったために興奮の度を高めようと努めた彼は、西側世界を挑発、警戒させるような言辞を弄することによって、つい分別の限界を越してしまった。・・あまりにも硬直した態度をとりすぎてしまったため、屈辱的な退却以外には行動の余地がなくなってしまったのだ。だがもちろん退却できるはずはない。まことに素人くさい、無責任な行動だった」（前掲書 553 頁）。ノーマンによればそれはナセルの「愚直さと偏狭さ」が原因であるという。「政治的なカードをもっと抜け目なく使いこなしていれば、これほどアメリカの反感を買う必要もなかったことだろう」（同 554 頁）、と。

しかし、ノーマンはナセルの人物そのものに対しては、会った当初から好意を抱いたようである。最初の会見（9月6日）では「大統領の飾り気のない率直な態度に感銘を受けた。軍隊時代の単刀直入の話し方が抜けないのだと彼は語っていたが、あいまい、もしくは不明瞭な言い回しは避けようと努めていたことが読み取れた」（同 544 頁）。また、ナセルを独裁者だと非難する意見もあるが、彼には「ファシズムもしくは共産主義の独裁者を特徴づけてきた要素が、すべて欠けているように見受けられる」（同 555 頁）、あるいは「いわば独裁者というより、イスラム気質にはぴったりの権威主義者なのである」（同 556 頁）とも述べている。また、アラブ世界の一般民衆を立ち上がらせたその力量を「いつの日かは共産主義に対して用いられることも考えられないではない」（同 551 頁）。「モスクワからの共産主義の宣伝」にさらされている近隣のアラブ諸国に対し、「〔ナセルが〕大衆感情を操れる強力なマスメディアを自由にできることは」多大な圧力となる、とも述べている（同 549 頁）。

ノーマンの予測は正しく、あるいは当たり過ぎていたともいえるかもしれない。カイロ発の「アラブの声」ラジオ放送によるナセルの演説は絶大な効果があって、1958年のイラク革命（ハーシェム王家体制の崩壊）をもたらした。その後のナセル政権によるエジプトおよびシリアの共産主義者の弾圧も苛烈であった。それにしても当時、自身が共産主義者

の嫌疑をかけられながら、どのような心境でこれらの文章をノーマンは書いていたのかとも思う。

ノーマンのナセルおよび当時のエジプトの政治情勢に対する認識も好意的なものであった。ナセルが説明するエジプトの「諸外国の征服によって味あわされた不幸な経験」（同 545 頁）を理解すべきだと考え、「主権に対する彼の非常な敏感さにしてもエジプトがかつて列強の属国であった歴史を考えれば、いくらかは大目に見てもいいのではないか」（同 552 頁）と述べる。さらには「1923～52 年の議会政治」も「外国の支配者によって強制されたものとみなしていた」（同 547 頁）というナセルの見解もそのまま紹介している。すなわち彼が旧政党の解散を命じ、民主的な議会政治を否定する政策を取ったのもやむをえないと考えているようにも見える。こうしたノーマンのナセルに対する好意的評価を、彼自身がかかわった GHQ による日本の民主化政策と比較してどのように考えたらいいのだろう。

ノーマンによるナセルの性格分析にもいくつか問題がある。先ほど紹介した政治家としてのナセルの欠点である「愚直さと偏狭さ」について、それは一つには「幼少期に恵まれず、しかも軍事教育しか受けていないため、必然的に外の世界に対する見方も狭い」（同 552 頁）点に起因するものだという。またエジプトは「ナイル河沿いの細長い緑地がいわば本島を構成している」ような「島国的な孤立した国」であり、こうした国は「ある程度は自己本位、偏狭な考え方を示すのが当然ではあるが、エジプトの場合はその度合いが、地理的な状況を一見して感じる以上に強烈なのではないか」と述べる。そして、この「地理的な状況」に規定されたエジプトの国民的性格が、ナセルにも影響を与えていると主張する（同 537-38 頁）。後段の説明について、それでは島国そのものである日本を、ノーマンはどのように考えていたのかとも思う [注 4]。また、前段については、ナセルの青少年期やその教育、教養の程度は彼の評伝で示される情報とは異なっている [注 5]。

ノーマン大使は、着任から二週間後の 9 月 3 日にナセル大統領と一回目、続いて 9 月 6 日に二回目の会見を行なった。それから一ヶ月と三週間経った 10 月 29 日にイスラエルが突如、シナイ半島に侵攻、これを口実にして翌日 30 日には英仏軍の介入が始まり、スエズ戦争（かつては「スエズ動乱」、第二次中東戦争とも呼ばれた）に発展した。エジプトにとって圧倒的に戦況が不利に展開する中、11 月 6 日には、英仏軍の空挺（くうてい）部隊がポートサイド市を占領し、これに対し市民が武装抵抗を開始して市街戦となった。こうした事態の深刻化に対し、米ソの合意の下、11 月 7 日に国連緊急総会は、英仏イスラエル軍のエジプト撤退、国連警察軍設置の案を可決した。この決議案にしたがい、カナダは英連邦の一員であったが、率先して治安維持部隊をエジプトに派遣した。ノーマン大使がナセル大統領に対し、カナダ軍が英連邦軍ではなく、国連軍の一部だとして、その疑念を解いたのは、12 月 9 日の三回目の会見のときだった。このとき問題になったのが、前に述べたカナダ国旗をめぐる誤解であった。

その後、ノーマンがナセルと最後の会見をしたのが、戦争が収束に向かいつつあった時期の 3 月 14 日のことであり、それから三週間後の 4 月 4 日にノーマンは自殺する。葬儀は

二日後の 4 月 6 日、カイロ市中心部のセントアンドリュース合同教会で執り行なわれた。遺体はカナダ空軍機でイタリアに運ばれ、8 日に火葬に付された。そして翌 9 日にローマのチミトロ・アカトリコ（非カソリック）墓地に埋葬された。ハーバート・ノーマンの遺骨が埋葬された同じ 4 月 9 日、スエズ運河での航行が 7 か月ぶりに再開された。

〔歴史と悲劇〕

悲劇とは何か。起きるのが予測できたことを悲劇とは言わない。予想もできなかったこと、あるいは本人さえも思いいたらないまま起きたことが、悲劇とされるのではないか。ハーバート・ノーマンの自死の場合もそうだと思う。丸山眞男は、前掲の追悼の辞で親友の悲劇について、次のように述べている。

「彼の心は歴史の神クリオのように、いつでも謙虚で繊細な神経が働いていたが、いわゆる内向性の性格とはむしろ反対で、陽気で上品な社交的な雰囲気を好んだ。もしノーマンがもともと孤独で沈うつなタイプであり、あるいは S・ツヴァイクのようにみるからに虚無のかげをただよわせた人物であつたら、いやせめてもう少しドクトリネリアの面を持っていたならば、彼の最後の報道がこれほどまでに私たち友人にたえがたい思いを感じさせなかったであろう。ノーマンを日頃『静かな楽道家』として、どこまでも人生や歴史の明かるい側面や発展的なモメントを見失わぬ心構えの持主として知っていただけに、死の断崖の前に行きつ戻りつした際に彼の心を占めたものを追想すると、顔をおおわずにはいられないのである」（加藤編前掲書 111-12 頁）〔注 6〕。

さて、ハーバート・ノーマン自身は、名著『クリオの顔―歴史随想集一』（大窪憲二編訳：岩波文庫 1986 年）の中で、歴史と悲劇について少なくとも二箇所にわたって、自説を述べている。最初の箇所は以下のとおりである。

「歴史は、巨匠の手にかかると、もとの材料がどんなに手におえないように見えても、壮大悲愴なおもむきを読者に伝えるのであるが、学問の専門化がいよいよ進んでいく今の時代には、歴史家がそういう壮大悲愴なものを失いがちであるという感じをまぬかれることができない。芸術としての歴史というものがその精神において詩、ことに悲劇と密接につながるものでないとするならば、あの英知をもつてきこえた、ギリシア人が、ミューズの一人〔クリオ：引用者〕に歴史を司（つかさど）らせはしなかっただろうと思われる」（『クリオの顔』9 頁）。

続いてノーマンは、「歴史を小さな問題にわけると、ときには書物の脚注一つさえも博士論文の題目になりうるという事情のもとでは、歴史のなかに本来そなわっている人間性の多くが行方不明になってしまう」（同）とも述べている。耳の痛い言葉である。

ノーマンにとって歴史とは「人間性を深める学問」（同 6 頁）である。それゆえに歴史は「壮大悲愴なもの」に、「詩、ことに悲劇に密接につながる」のである。歴史が全人間的な事実や経験を総体として扱うものであるからこそ、人間は、その歴史と悲劇の結びつきに本来的に惹きつけられる、そのように彼は述べているように思う。

〔変化に抗うことから起きる悲劇〕

ノーマンが『クリオの顔』で歴史と悲劇について言及しているもう一つの箇所は、歴史における「変化」を認めることなく、それに抗（あらが）うことから起きる「悲劇」についてである。まず、彼は「歴史にはいったい主流とか統一テーマというものがあるか」という問いに対して、「歴史の中心問題は、民族の場合でも国家の場合でも、変化の性格を発見し説明することである、と大胆ながら答えない」と述べる。また「決定的な問題は、表面の迷わされやすい変化と深部の、したがって見つけにくい、しかし永い目で見ると最も決定的な性格をもった変化とを区別することである」という（同 10 頁）。

さらに「ある政治家が成功するか失敗するかは、せんじつめてみれば、かれが自分を取りまく世界の社会的変化と諸国民とのあいだの力の均衡を考慮に入れる程度いかにかかっている。そこで歴史上の大きな悲劇は、指導者より民衆が、それもしばしば人格の高潔な人びとが、近い時代または同時代の変化の性格と方向を測定しえなかったところから起こってくることがある」。歴史の深いところにある変化を読み誤った結果「破局がそうした人びとを呑みこんでしまう」。その場合「歴史の皮肉さは、専制権力を振う指導者が、大きく抗いがたくなった変化を暴力によって押さえつけようとする場合に恐ろしい悪夢になってしまう」（同 11 頁）。それに続いてノーマンは、「時計の針を逆に戻そうとした」ヒトラーやゲッペルスについて言及する。

彼がこの随筆を執筆したのは、1949 年 11 月初めであり、ナチズムがもたらした破局の余燼（よじん）が依然、煙（くすぶ）っていた時期のことである。その当時の彼が、同じく破局にいたった日本の近代の歴史を念頭においていたのは当然のことである。「ノーマンの意識は、ファシズムと戦争の眺望によって形成された。従ってかれは大きな悲劇的失敗の複雑な構造的背景を明かすことに努めることで、日本の歴史を説いた」とジョン・W・ダワーは解説している（加藤編前掲書 198 頁）。

さて、先に挙げた丸山は追悼の辞の中で、ノーマンによるスエズ戦争時の調停外交は、脱植民地化という「変化」に抗おうとした旧西欧列強に対し、彼らに文明国としての誇りを取り戻してほしいという彼の願いに支えられていたのではないかと、として次のように述べている。「アングロサクソン国家の伝統として誇った政治的叡智と成熟した判断力が恐怖と憎悪によってくらませようとしているまさにその時に、ノーマンがアジア・アラブ民族主義のあらしのただ中であって『大きく抗いがたくなった変化』に対する適応能力を西欧側に取り戻させるために渾身の精力を傾けたと推察しても、おそらく彼の霊を冒瀆することにはなるまい」（同 115 頁）。

ノーマン自身もナセル大統領との三回目の会見記（1956 年 12 月 9 日）において、次のように述べている。「イーデン氏が犯した大きな過ちは、アラブ世界の各国指導者の間には確かにさまざまな反目やねたみが存在しているものの、その根底には真のアラブ・ナショナリズムとアラブの団結意識の潮流が流れていることに気がつかなかったことだと彼〔ナセル〕は信じていた」（『全集』第二巻 564 頁）。

しかし、目下の中東情勢の推移を見ればわかるように、「アラブ・ナショナリズムとアラブの団結意識の潮流」という変化の波は、今や見る影もない。2011 年アラブ民衆革命の波もつかの間の夢に消え、アラブ世界は現在、分裂と抑圧の最底辺に漂っている。だが真に洞察力のある歴史家は、世界史の奥底に流れる変化を感知することができるのかもしれない。

ハーバート・ノーマンの『クリオの顔』が出版されてから（岩波新書版 1956 年）、今年 2026 年でちょうど 70 年が過ぎた。現在の世界において「変化」を理解できず、それに抗う「国家や民族」によって引き起こされている悲劇とは何であろう。2023 年 10 月に始まるガザでのジェノサイドを振り返れば、その答えは明白である。ファシズムの時代と違うのは、「時計の針を逆に戻そうとする」ことから起きる悲劇が、こうした「変化」に抗う「国家や民族」自身ではなく、その侵略を受ける人たちの破局（ナクバ）として一方的に表れている点である。

〔歴史の悲劇と個人の運命〕

前に述べたように、西側外交官としてのノーマンがナセルの能力に寄せた期待は、当たり過ぎるほどであった。ノーマンの死後、アラブ民族主義のチャンピオンとして、アラブの“街路の政治”（大衆政治状況）を支配したナセルは、ムスリム同胞団や共産主義者などあらゆる反対勢力に対する弾圧を加速化していった。この「カイロ通信」の前号（第 6 号）では、エドワード・サイード一家の主治医ファリード・ハッダード（1922-59 年）が共産主義者として逮捕され、拷問死したことを紹介した。

シリア・レバノン共産党の幹部であり、エジプトとシリアの国家統合（アラブ連合共和国）を支持し、ナセルのダマスカス訪問に際しては党機関紙に「ナセル、ようこそシリアへ」という論説を書いたファラジュッラー・ヘルウ（1906-59 年）は、シリアの治安警察によって虐殺され、遺体は硫酸で溶かされた（長沢「アラブ共産主義者の殉難」『アラブ革命の遺産』平凡社 2012 年）。ナセルの社会主義化政策を支持しながら、獄中で拷問死した理論的指導者シュフディー・アティーヤ・シャーフィイー（1911-60 年）については、かなり前だが「エジプト資本主義論争の構図と背景」という論文（長沢編『東アラブ社会変容の構図』アジア経済研究所 1990 年）で言及した。もちろんその他、この「アラブ革命の時代」には、名も知られぬまま、民族解放や革命のために命を散らしていった人たちが数多くいる。

正確な年月は分らないが、ノーマンの死の前後には、アルジェリア独立戦争時（1954～62 年）、フランス軍によって殺害されたズリハ・ウダイという女性活動家について、アジア・ジェバールが『墓のない女』（持田明子訳；藤原書店 2011 年 [原作 2002 年]）で紹介している。ジェバールは『愛、ファンタジア』（石川清子訳；2011 年 [1995 年]）などで知られるアルジェリアを代表する作家であるが、生まれ故郷のセザレー市の生家の近所にいたこのズリハという女性に強い関心を抱き、取材旅行する。有名な「アルジェの戦い」

（同名の映画「ジッロ・ポンテコルヴォ監督作品 1966 年」でも知られる）が起きた 1956 年、ズリハは「マキ」と呼ばれる灌木の山に登り、資金や物資の運び役となり独立闘争を支えた。フランス軍に捕まった彼女はヘリコプターで連れ去られて消息不明となり、マキはナパーム弾で焼き払われた。

同じ時代に起きたこれらの人たちの悲劇的な死は、ハーバート・ノーマンの死と同じく、歴史の中の「変化」の流れに抗うことで起きたのではない。むしろ「変化」とそれに抗う動き（「反動」という言葉もある）が絡み合う複雑な渦の中に、彼らが身を投じていった、そのために悲劇的な死へといたったのである。それにしても彼らは、なぜその渦の中に飛び込んでいったのか。危険を知りながら、自らベイルートから死地のダマスカスに赴いたファラジュッラー・ヘルウのような例もあれば、その運命を知らないまま、突如として死に直面した場合もあろう。そしてアルジェリア人作家ジェバールがズリハに心ひかれたように、なぜ人はこれらの悲劇に関心を寄せ、惹きつけられるのだろうか。それは悲劇を、人間にとっては不可知である運命と結びつける考え方があるからではないだろうか、と思う。

ところでノーマン自身は、運命論者ではなかったと考える。それはナセル大統領との会見記の次の一節からもうかがえる。

「(ナセルは) 敬虔なイスラム教徒でもあるだけに、どちらかといえば運命論者であることも間違いはない。自らを神の使者と考えているのは、その使命観に基づくものである。この考え方は、狂信主義の色を帯びたある種の謙虚さを誘発する。狂信主義と謙虚さのこの組み合わせは、カリスマ的な力を備えていた過去のイスラム指導者の多くにも見受けられたものではあるが、このこともやはり不安を抱かせる」(『全集』第二巻 556 頁)。

この分析の評価はここでは述べない。彼は、こうした冷静な分析を行なう一方で、遺書で告白したように「環境に圧倒され」てしまい、この世の生の活動を永い「幻想」と見なし、キリスト者として死の道を選んだ。それは同じく一神教徒として、神が定めた運命（イスラームの場合の「カダル」）を認めたということを意味するのかどうかは分からない。

さて、ノーマンが歴史をもって「壮大悲愴なおもむき」を見せると述べているのは、ギリシア悲劇に思いをはせてのことかもしれない。ギリシア悲劇の中心的なモチーフは、神々が決めた運命（モイラ）である。個々の人間は、ヘーゲルの言うような「歴史（理性）の狡知」に操られる、その運命の糸、あるいはその切れ端に縋（すが）る存在にすぎない。『クリオの顔』の中の次の文章が示すように。ここでノーマンは、運命を司る神の目ではなく、歴史を俯瞰（ふかん）するミューズ、クリオの目で眺めている。

「巨匠たちの歴史作品に見られるように、歴史は決して一直線でも、単純な因果の方程式でも、正の邪に対する勝利でも、暗から光への必然の進歩でもなかった。それよりも歴史は、すべての糸があらゆる他の糸と何らかの意味で結びついているつぎ目のない織物に似ている。ちょっと触れただけで、この繊細に織られた網目をうっかり破ってしまうという恐れがあるからこそ、真の歴史家は仕事にかかろうとする際にいた

く心を悩ますのである」(『クリオの顔』13頁)。

すでに言及した筆者の『アラブ革命の遺産—エジプトのユダヤ系マルクス主義者とシオニズム』は、ノーマンが述べる歴史の「壮大悲愴なおもむき」にささやかではあるが迫ろうとした試みであった。アハマド・サーディク・サアド(1919-88年)とヘンリ・クリエル(1914-78年)という二人のユダヤ系エジプト人の若者は、マルクス主義と出会い、さらにパレスチナ問題、あるいはシオニズムに対し、それぞれ異なった態度で向きあいながら、アラブ革命の荒波の中を生き抜いていった。二人の晩年は異なったものとなったが、自らの運命との戦いに彼らは決して後悔はしていなかったと思う。

* * * * *

今回も前号に引き続き、ガザから来たカイロのパレスチナ人について簡単に報告しておきたい。第3号「パレスチナは遠いか、近いか——過ぎ行く季節中で」で言及したアラーさんとその家族とはその後、何回も会うことになった。彼女は40名以上のガザから来た女性たちに刺繍の仕事を世話し、その作品の一部を私たちが買う機会があったからだ。エジプトではパレスチナ人の正式な就労は許可されていない、それどころか内戦のスーダンやシリアから避難してきた人たちのような難民としての居住許可を得ることもできない。したがって、カイロのパレスチナ人家族の稼ぎ手は内職のできる女性たちしかない、ということになる。アラーさんの夫は、友人の一人が市場で小鳥(インコ)を買ってきて室内で繁殖させて芸を仕込んで売るといふ商売を考えついたと言って、その動画を見せて教えてくれた。だが、それは例外である。



さて、アラーさんに紹介されて、空港に近い地区にある、ガザから来た子どもたちの学校を訪ねたのは4月の半ばのことである。この学校は、私立学校の授業が終わった後、いわば放課後の時間(午後3時から7時)の校舎をパレスチナ人用の授業に使うという形で運営されていた。学校の使用料はタダだということで、これはこの私立学校の経営者の善意によるものである。その経営者は、偶然だが二か月前の2月に学振の事業紹介(日本での研究フェローシップなど)で訪れた大学、カイロ郊外の衛星都市、バドル市にあるバドル大学を創設した人物であった。こじんまりしているが、しっかりした印象の大学だった。このバドル大学の事務部で働くパレスチナ人のマルワさんという方がパレスチナ人学校の運営に関わっているということで、説明をしてくれた。それによると、彼女が事務局長を務める「“ピラミッドの夢”イニシアチブ基金」という団体が、この学校の他にもガザから



来た子どもたちのための学校を6か所以上、設立・運営してしているのだという。

マルワさんによれば、2024年4月に学校を設立した当初は900人の規模だったのが、「基金」が経営する学校の生徒数は現在、10倍の9000人まで増えているという。ガザからエジプトに来たパレスチナ人の総数は12万人とも言われる。その半数が学齢期の子どもたちだとすると、他にもこ

の種の学校や私塾などがあるとしても、教育を受けられないでいる児童たちも相当数いると思われる。

この学校は幼稚園KG2から高校3年までの一貫教育であり、現在の生徒数は750名、保護者家族420。授業料と教科書代は無料であり、先生は全員ガザから避難したパレスチナ人、その給与はSave the Childrenなどの国際NGOや、エジプトにいるパレスチナ人からの寄付により何とかまかなっているとのことであった。パレスチナ自治政府（PA）の教育大臣が学校を訪問したことがあるが、いっさいPAからの支援はないとも聞いた。

学校を訪問した私たち夫婦に対し、幼稚園部を除くすべての学年の授業を見せてくれた。低学年の児童たちの合唱から、高学年となると、自作のアラビア語の詩を朗読してくれる女子生徒もいた。日本について何か知っていると訊くと、「ヒロシマ」との答えも返ってきた。将来は何になりたいかと訊くと、もちろんサッカー選手という子が何人かいたが、ミトマ（三苫）の名前が挙がったのには驚いた（今回のワールドカップは残念でした）。

私たちは20年以上にわたり、カイロ日本人学校を通じて、低所得地区にある小さな学校を支援してきた。その教育環境に較べるなら、中流上層の家庭のエジプト人向けの私立学校の美しく清潔な校舎で学ぶ、パレスチナ人の子どもたちは、はるかに恵まれているように見える。しかし、明るい授業風景から、そんなことは微塵も感じられないが、肉親を失い、戦火の記憶も生々しい子どもたちの心の傷は深い。アラーさんも心理カウンセラーの一人としてケアに当たってきたし、また定期的に心理学的検査もしているのだと「基金」の事務局長のマルワさんは言う。

カイロに避難してきた家族や子どもたちも大変だが、もちろんガザの事態は「停戦」とは名ばかりで深刻な状態が続いている。しかし、彼らは前を向いている。そのために私たち市民はいったい何ができるか。これまでガザから来たパレスチナ人家族との面談を通じて考えているのは、リモートで勉強ができるオンライン教育を支援することである。市民のイニシアチブが公的な政策につながっていくことを期待しながら具体的な提案をしたいと考えている。

[注 1] Samir Raafat, “Pretty in Pink: Zamalek’s Maison du Canada,” *Cairo Times*, 16 Nov. 2000.

[注 2] ただし、晩年のノーマンのキリスト教回帰は論争的なテーマとなっているようである。Sachiyo Takashima, “Return to Christianity: Herbert Norman’s Letter to his Brother Before his Suicide.” (2006-07-22) *Historical Papers*. [<https://doi.org/10.25071/0848-1563.39192>] 参照。
<https://historicalpapers.journals.yorku.ca/index.php/historicalpapers/article/view/39192/35534>

[注 3] John Howes. “Japan in Canadian Culture.” Canadian Embassy, Tokyo, Japan (December 12, 1994) 参照。
<https://web.archive.org/web/20030430140855/http://www.asjapan.org/Lectures/1994/Lecture/lecture-1994-12.htm>

[注 4] 国民的性格論については、ガマール・ヒムダーンのエジプト的性格論争をめぐる議論を参照（長沢栄治『エジプトの自画像』平凡社 2013 年）。

[注 5] 長沢栄治「ナセルの遺産—現代アラブ専制体制の起源」『アジアの世紀へ』（アジア人物史 12）集英社 2024 年参照。

[注 6] S・ツヴァイク（1881-1942 年）はオーストリアのユダヤ系作家で、『マリー・アントワネット 平凡な女の肖像』など伝記文学の名手として知られる。ナチスの迫害を逃れ、イギリスから米国へと渡るが、ヨーロッパ文明の将来に悲観し、再婚した妻と共に自殺した。「ドクトリネリア」（ドクトリナリア Doctrinaria）とは、教条主義的なという意味。